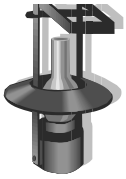
知恵の樹
104　号
2005.10.28



町田の歴史を語る「小島日記」のこと

小島日記研究会代表幹事　　岩﨑　孝和

町田市小野路町（江戸時代は武蔵国多摩郡小野路村）の小島家（現在は小島資料館）には、膨大な量の日記史料が残されています。その点数は 192 点にもおよび、そのうち最も量の多いのが「小島日記」と呼ばれるもので、小島家の当主が 4 代にわたり天保 7 年から大正 10 年まで、86 年間にわたって書き継がれてきたものです。また小島家 19 代の当主で「小島日記」を書き始めた角左衛門政則は、嘉永 3 年から慶應 3 年 5 月死の直前まで、17 年間にわたって「聴書」（ききがき）と表題した日記も記しています。父政則と子鹿之助為政、親子で同時期に日記を記していたことは、大変貴重な歴史資料であり、かなり珍しいことであると思います。

「小島日記」の体裁は横帳形式（縦約 33 ｾﾝﾁ、横約 11 ｾﾝﾁ）といわれるものです。

「小島日記」には、村に関する記録、農事・養蚕やその他の生産、小島家に出入りする人々、江戸や他地域の情報、多摩地方の文化人として活躍した小島家当主や武州・相州の農民たちと儒学・国学・漢詩和歌・挿花・絵画の文人墨客、近藤勇など天然理心流の剣術師範などが記述されています。その内容の多彩さから、江戸時代後期の農村社会の様相や、そこに生きる人々の姿を知ることのできる貴重な歴史資料として注目されてきました。

この「小島日記」を解読し始めたのは、25 年前の 1980 年 5 月で、小島政孝氏をはじめとし、渡辺奨先生や久保田昌希氏・新井勝紘氏高田敏行氏に小生など 7 人でスタートしました。当初は、日記に記された文字が分からず読み進むのに大変苦労しましたが、今では天保 7 年から明治 6 年までを解読しそのうち天保 7・8・9 年、文久 2・3・4（元治元）年、慶應元・2・3・4（明治元）年の 10 冊を刊行しております。2001 年 5 月には、研究会創立 20 周年を記念し、明治大学名誉教授で地方史研究の第一人者である木村礎先生に講演をいただき、研究会のあり方を確認するとともに、今後の活動に多くの示唆を受けました。

また、この年 7 月には、『小島日記物語』を出版しました。この本には、新選組の近藤勇や土方歳三・沖田総司らと小島鹿之助や多摩の農民たちとの親交を物語るさまざまなエピソードをはじめ、小島家を訪れた文人墨客の話、伊勢参りなどの旅の話など、小島日記の記事を通して、幕末期の町田や多摩地域に生きた人々の軌跡を分かりやすい文章で紹介しています。「小島日記」とともに是非ご一読ください。

日雇併諸職人
天保十五甲辰日記
懸合対談

←「小島日記」の表紙

『図書館森時代』を出版したそのわけをお話しいたします

SIN

編著者　山本　宣親

『図書館森時代』A5版360頁
2940円／日本地域社会研究所
http://www.n-chiken.com

「図書館はヒトから人間になるところだ！」富士市立図書館に職員として勤めているときに、私はそう感じました。

富士市役所の事務職員から図書館に異動した時、私は図書館を「一部の本好きの市民が読み物としての本を無料で借りるところ。児童や生徒が勉強に来るところ」としかイメージしていませんでした。施設は古くて狭く、そして暗いところでもありました。しかし何年かの取り組み後、市民や行政の力と議会の了承を得、新中央図書館が建設され、それ以来図書館利用は急速に変化しました。

その記録は拙著『図書館づくり奮戦記』（日外アソシエーツ）に執筆した通りですが、その「続編」を求める読者の声が全国からかなり寄せられました。その声に背中を押されて、機会を得て再び出版をと考えていました。しかし、それは拙著の延長としてのレベルで単なる活動の記録だけにはしたくないと思いました。

実を言えば、現職の身で仕事に関する出版をするということは、かなり厳しい局面もありました。「言論出版の自由」は法制化していても、その実践は覚悟を伴うものでした。そんな経験から、私は引き続いて書くこと・話すことを通して図書館の発展に尽くしたいと考え、その取り組みのひとつとして出版も考えていました。

幸い、退職間際に２社から出版の話があり、それぞれ単著と共著の企画でした。私は、共著を先に出版しようと考えました。それは共著の企画を示したのが高橋勝氏だったからです。

彼は実に稀有な人物で、その出会いは本文の「おわりに」に書いてある通りです。

出版の目的は冒頭のテーマを考えていました。
例えば学校や保育園、病院や消防署など公共施設の名前を聞けば、それがどのような仕事をするところか多くの人たちの理解は一致し、間違っていないのですが、図書館だけは理解が様々で大きく違います。このことは、わが国の文化と民主主義の立ち遅れを反映しているものと私は思うのです。

したがって、図書館の理解を広げることが大切。私が図書館を当初イメージしていたように考えている人たちはまだまだ多いと思います。

しかし、正論を声高に叫ぶだけでは図書館の理解と支持は得られるものではありません。多くの人たちの共感を得るには、実践を通して具体的にわかり易く話し、その上で行動に参加する人を増やすことが大切です。

そのためにはメンバーがポイントだと思いました。私はこれまでの図書館活動を通して、図書館にこころ寄せる方々との出会いが全国あちこちに数多くありました。

その中でも町田市には職員と市民それぞれの立場で執筆に加わってほしい人がおりました。でも、新規の仕事を抱え多忙な職員に声を掛けることは控えました。その代わり、本ができたら「書評」をお願いすることでこの取り組みに参加してもらおうと考えました。増山さんには図書館ボランティアとしての立場で是非とも執筆してもらおうと思いました。幸い、賛同してもらうことができました。

６人のベストメンバーが決まりました。高橋氏を加えて７人によりＥメールで執筆に取り掛かる前の論議を徹底しました。こうした積み重ねから「章」立てと分担が決まりました。そして共通のコンセプトとして「理論より経験を、理想より実践できる提言を！」が全員一致で合意されました。
学者の理論書とは違う、また図書館員や市民の活動記録でもなく、新しい切り口でこれからの時代にふさわしい図書館像に迫っていこう！

「人に役立ち、地域に貢献する図書館は日本を変え、地球をも救う！」そんな熱い思いで互いに遠慮

なく批判しあって執筆を重ねました。

予定を大幅に遅らせ、1年余をかけてようやく『図書館森時代』が仕上がりました。

内容は各著者が「われ図書館をかく語りき」と、自信を持った力作なのですが、どんなに内容が充実した本でも、多くの人たちに読んでいただかなければ何にもなりません。

価格は高いと思われるかも知れませんが、それは主観的な判断で、価格以上に役立つ本にしていただきたいと願っています。それだけの役立つ情報が盛られていると自信を持っています。

少なくても全国の図書館には備えてほしいと願っています。せめて利用者としてリクエストしてくださり、その上でお目通し頂き、率直な感想やご批判をお寄せくださるようお待ちしております。

（静岡・富士市在住／大学非常勤講師）

かえで文庫　　*成瀬中央小学校の子どもフェスティバルに参加して*

9月30日(金)8:35～11:55

子ども48名　大人10名

学校全体を使って、子どもが中心になって行った、成瀬中央小の恒例の秋の行事です。体育館では「ピッタリアスレチック」、図工室では「体力テスト」、その他、「宝さがし」「フィッシング」など楽しい部屋が用意されていました。PTAが担当したのは「つくってワクワク」、地域の人々担当は「竹とんぼをとばそう」と「おはなしのへや」でした。

かえで文庫から4人が出向き、集まった子どもに応じておはなし会を実施しました。保育園児15名が訪れたときは手遊び、からだあそびを取り入れたりといろいろに工夫して対応し、汗を流す場面もありました。

内容は下記の通り。

紙芝居・・・・ほらだんしゃくのぼうけん
やまんばのしっぱい
おつきさんにばけたいの
かわへおちたたまねぎさん

絵本・・・・・ねむれないの？　ちいくまさん
こんとあき
つもちこくのおとこのこ

語り・・・・・ああという鬼／とちの実まなこ

手遊び・・・・しもばしらがたおれた
たぬきさん火をひとつくださいな
おてぶしてぶし／へびになってつながれ

（丸岡和代）

＜本の紹介＞

図書館に行くと、私は新刊コーナーをウロウロします。何か惹かれる本はないかな～と。文芸春秋刊（05,4月発行）の「こころの一冊」という本が目につきました。日本エッセイスト・クラブの会員３７０名の中の３５名の方々の「読書についてのエッセイ集」です。

エッセイの名手たちが選んだ、マイ・ベスト・ブックと本の帯にありますが、読んだことのある本は「こんな読み方もあるのね！」という驚き、読んでいない本は「あ～、読みたい！」。各々の本への思いが伝わってきます。

それに何よりこの本を紹介したいのは、「すすめる会会員」の辻由美さんが寄稿しているからです。辻さんは、やっぱり夏目漱石の本です。やっぱりというのは、読書会「町田読書クラブ」の例会でも漱石を一押ししているからです。帯の「どういう本が好きか、それで君がどういう人間かわかる」とあるのは、チョット、ねぇ・・・。　（小林陽子）

蔵書点検を終えて

中央図書館奉仕係・近藤裕一

蔵書点検とは

今年も6月に町田市立図書館では館内整理期間のため休館し、中央図書館で10日、地域館で1週間をかけて蔵書点検を行ないました。蔵書点検というのは、図書館の資料が無くなっていないか、また実際に資料のある場所が正しいかを点検する作業です。

システム更改前の蔵書点検との違いにふれながら、今年の蔵書点検の報告を簡単にしたいと思います。

改善点

昨年からの蔵書点検が以前と異なっている点は、点検期間の短縮と中央館、地域館との別日程での実施です。

旧システム時代にはシステム上の制約から全館同時に蔵書点検を実施していました。したがって、その期間も蔵書数の最も多いため日数を必要とする中央図書館の日程にあわせざるを得ず、2週間が必要でした。

新システムでは、館ごとに点検できるようになりましたので、中央図書館と地域館に分けて行なう事が可能となり、地域館の日数を短縮することができました。さらに、新しいハンディターミナルの資料番号読み取り感度の向上や読み取った点検データとシステムデータとの照合のための処理時間の短縮などで中央館でも短縮ができました。

点検結果

不明資料数と蔵書数は下のとおりです。

不明資料とは、システムデータ上は図書館に　あることになっているのに、実際には図書館の書架にはなかった資料数です。蔵書数に比べて中央と金森の不明資料数が少ないのは、BDSが設置されているためと考えられます。不明資料は次の点検で発見されることもありますが、3回の点検を経過しても見つからない場合は除籍処理を行ないます。今年は2,100点を除籍しました。

今後の課題

個人的見解ですが、将来的には中央図書館も点検期間を地域館と同じにできればと考えています。しかし、そのためにはハンディターミナルの台数を増やす必要があります。数年先になると思いますがシステムの機器更改時に増設できれば実現できると考えています。しかし、今の台数で日数を短縮するには、開架部分と閉架部分を1年ごとに点検を行なうなどの工夫が必要になると思います。

また、利用者の利便性の視点から、現在のような中央館、地域館の2回の点検と各館ごとに日程をずらして点検を行なう（システム的には解決しなければならない課題もあります）、さらに蔵書点検そのものを隔年で実施するなどの案を検討する時期にきていると思います。

不明資料数と蔵書数

	中央	さるびあ	鶴川	金森	木曽山崎	堺	合計
不明資料数	470	1,381	393	100	216	195	2,755
蔵書数	587,906	135,122	56,549	130,714	64,570	71,427	1,046,288

第10回学校図書館のつどい　＜報告＞
～生きた学校図書館をめざして～

さる9月19日、日本図書館協会研修室にて表記の会が日本子どもの本研究会・親子読書地域文庫全国連絡会共催で開かれた。祝日にもかかわらず会場は日本全国から集まった多数の参加者でいっぱいとなった。午前中は黒澤会長（日本子どもの本研究会）の挨拶に続いて逗子市教育長野村昇司氏による講演、午後は三鷹市小学校図書館司書を務めてきた笠嶋庸子氏による実践報告、その後参加者の意見交流が行われた。

言葉の豊かさは人間の豊かさを規定する

野村氏は小学校教諭・校長、玉川大学講師を務める傍ら文学作品執筆を続けていたが、2002年逗子市が教育長を全国公募した際応募し、528名の中から見事選ばれ今日に至る。この間学校司書の配置をはじめ積極的に読書推進に努めている。はじめに教育長に応募したいきさつなどが面白おかしく紹介された後、本題の逗子市の読書推進について話された。

逗子市は海に囲まれた風光明媚・気候温暖な土地柄で、日本で6番目に所得税の多い市であるという。しかも市予算の２０％強を教育に費やしていることは何より市民の教育関心の高さを示しているのではないだろうか。

「言葉の豊かさは人間の豊かさを規定する」。氏はこれを基本理念に、読書を生活の中に取り込むこと―「読書の生活化」が必要と強調し、これらを踏まえて子どもたちに培いたい能力として３つ挙げる。１）人間理解を媒介とした相互啓発能力 ― 自分と異質なものを理解すること、自分を認識すると同時に他をも認識する、そしてお互いが啓発しあい成長していく自己教育力。2）追求としての情報活用能力 ― 与えられた情報を瞬時に判断し思考する、しかもそれを再構成し再生産できる能力。よく読書感想文を書かせることについては否定的な意見もあるが、感想文はまさにこの言語情報を自分で受け取り再構成し発信することで、決して否定してはいけないと言う。３）は健康生涯を送るためのスポーツ運動能力だがこれは省略し、１と２の相互啓発能力と情報活用能力をいかに育てるかが、これからの教育を考える際の基盤であることを示された。

さて逗子市の読書活動推進の取り組みだが、基本方針は「子どもが読書に親しむ機会の提供」「学校における読書活動の推進」「地域協力による子どもの読書活動の理解と関心の普及」にある。一つ目の「子どもが読書に親しむ機会の提供」については、幼児期から本に親しむ環境作りが大切との観点からの、市立図書館の児童書の充実とブックスタートの実施に象徴されている。ブックスタートも、単なる読み聞かせではなく母親に読み聞かせがいかに大事かを知ってもらうことに主眼を置き、ただ本を与えるだけに終わらずその後もお母さんたちが赤ちゃんに本を読んであげ続けているか、予算を組んで追跡調査をして結果を出すようにしたという。ここまで教育長が熱心に音頭を取ってブックスタートをしている自治体が他にあるだろうか。他にも全国公募の手作り絵本コンクールなど、地域社会の中で絵本・読書の大切さを広める企画が目白押しだ。

この会で一番関心を呼ぶのはやはり二つ目の「学校における読書活動推進」であると思われる。昨年発表され論議を呼んだＯＥＣＤによる学力の国際比較では「読解力の低下」が大きく報道され、国を挙げて読解力向上を謳っているが、氏によればこの読解力こそまさに「情報活用能力」であると言う。ＯＥＣＤの読解力の概念は情報を取り出し、推論し、吟味し理解し、それらを自らの考えによって知識や経験と関連付けられる能力と解釈でき、氏はさらに発信までをも付け加えて新しい「読解力」と呼ぶ。どうしたらこの力を有効につけることができるのか、この分野はまだまだ模索状態である。逗子市の今後の実践に期待したい。

学校図書館については、教育長になって学校訪問をした際の図書館が殺伐としたいわゆる本の館であったことから、これでは子どもたちは来ない、子どもは施設や建物に惹かれて来るのではなく人の温もりを求めてやって来る、との想いを抱き早速「ひと」の配置を議会に諮る。

なんという迅速さ。自治体の規模が小さい事も幸いしているのかもしれないが、何年も運動しても一向に埒が明かない身とすればうらやましい限りだ。

平成15年度より全市に配置された図書館指導員は全員司書資格を持ち、非常勤で週３日勤務だがそれでもかなり効果が上がっているという。神奈川県では１校に１人ずつ配置したところは逗子市だけだそうで、２校に１人というのではなく各学校に置くことが子どもたちへの読書の浸透につながっていく、現場で動かなければ本当の読書推進にはならないとの考えには同感だ。基本理念をしっかりと押さえながら細かいところまで目を配り、教育長が率先して読書推進を強力に浸透させている様子が印象付けられた講演だった。

ここまできました　三鷹の学校図書館

午後は、三鷹市立第五小学校で７年半司書として勤務されてきた笠嶋氏から実践報告があった。三鷹は平成７年にはじめて小・中１校ずつ学校司書が配置され、その後順次司書配置と図書館整備が進み、
１４年度に全校配置が完了している。しかしここへ来るまでには長い道のりがある。特筆すべきは、三鷹文庫連と小教研の交流会から学校司書の問題が深く認識されたのを契機に三鷹の学校図書館を考える会へと発展し、その精力的な活動の結果として今日があることだろう。笠嶋氏はこの運動の一端を紹介し、市民による支えがあってはじめて安心して司書としての仕事に専念できたことを強調された。

また計らずも、三鷹の教育委員会が早くから学校図書館に関して先進的なビジョンを持っていたことを『これからの学校図書館のあり方』を読み返す中で再認識されたという。三鷹の学校図書館は、基盤にきちんとしたビジョンがあったことでどの学校も同一のレベルで活性化が実現できたのだという。明確なビジョン、実行のための具体的な計画、そして実貸出や読書のための場として考えるのではなく、新しい学力観に立脚した学習情報センター・研究センターとして位置づけている。そのために必要な施設・設備についても詳細にイメージされており、これが実際に図書館を整備する際のスタンダードとし現のための潤沢な予算、この三者が揃ってはじめて豊かな学校図書館は可能なのだと今更ながらに感じる。三鷹はそれを示すいい例だろう。この冊子では当初から学校図書館を単なる本のて使われ、広さや冷暖房設備またコンピュータ管理などがいわば標準装備となっている。学校間格差の少ない理由の一つと言えよう。また整備事業が始まってすぐに蔵書調査があり、蔵書の不足だけでなく古さが確認され、豊かな図書購入費の保証とともに廃棄手続きの簡素化が進められたことは、図書館の再生に一役買っている。廃棄をするのに専門知識のある司書の存在ももちろんだが。

ネットワークに関しても全校配置になるまで蔵書入力の仕方に必ずしも統一がなされていなかったそうで若干の不具合はあるものの、物流・人的配置なども整備されている。現在さらに効率的な方法を検討中だという。司書の採用条件などはかなり恵まれていて、遠くから通っている人もいることから、優秀な人材が集まってしまうとうらやまれる。むしろここへきてネックとなっているのは地域開放かもしれない。ただ地域開放といっても保安上の問題が頻発している今日の状況を見ればやみくもに開放できるはずもなく、三鷹も在校生とその保護者・家族に限っているようだ。勢い利用者もけして多いわけではないらしく、司書の勤務を週６日とタイトにしてまで実施しなければならないほど緊急な要請なのかと、これに関してはいささか首を傾げざるを得なかった。三鷹のみならず地域開放を意図しまた実施している自治体は多く、これからの検討課題の一つであろう。残念ながら三鷹は辞められたが、早く他の学校図書館で子どもたちに本の楽しさ、図書館のすばらしさを伝える前線に再び立ってほしいと切に願うのは、私だけではないだろう。

参加者からは司書間の経験交流の有無などについての質問が出された。また司書教諭の存在についての質問では、司書の働きを学校、さらには教育委員会へとつなげるパイプ役としても重要であるとの回答があった。

各地の状況・意見交流

交流会では府中の事例として、司書の勤務時間が短いのにボランティアが多く、その対応に苦慮しているといった報告が寄せられ、ボラン

ティアとの棲み分けの問題がここでも痛感させられた。また拠点校方式で２０校に２名の司書が配置された西尾市や、市内の半分に配置が済んだ飯山市の報告などがあった。全校配置には至っていないが効果はてきめんで、司書がいないと授業が成り立たない状況が生まれつつあるという。また各自治体にあるはずの図書館協議会の活動について情報を求める質問があり、狛江市や鶴ヶ島市などからいくつか情報が寄せられた。活発に活動している図書館協議会はまだまだ多くはない現状だが、少しずつ市民参加が多くなってきていると思われる。

午前･午後の二つの講演は行政のトップと現場という、いわば学校図書館の充実を目指す運動の両端からの報告であった。他をうらやんでばかりいられない。魅力ある講演と活動を続ける仲間たちから刺激と励ましとをもらい、さて町田では何ができるだろうかと次の一手を考えつつ電車に乗った。

（水越規容子）

ファンタジーは現実を豊かにする

～ラルフ・イーザウ氏の講演を聴いて～

10 月 4 日（火）夜 6 時半より青山のドイツ文化センターにおいてラルフ・イーザウ氏の講演会が開かれた。イーザウ氏はエンデに深く影響を受けた作家で『ネシャン・サーガ』などのファンタジー大作を次々と発表し日本でも人気の作家。今回は『はてしない物語』に描かれたファンタージェンをドイツの 6 人の作家がそれぞれの視点から描きなおすという魅力的なプロジェクトの第 1 号として刊行された『ファンタージェン―秘密の図書館』の紹介を兼ねての来日だ。通訳の酒寄氏が汗をかくほどの熱心さで、予定を 1 時間も上回って自身の作品のみならず作家としての意気込みをとうとうと語った。氏は心臓にペースメーカーがあるように、物語には思考のペースメーカーとでもいうような
う。そして社会システムに対
方や多角的な視点を人々に与
としての役割であるとも。
斜に構えることのない、
まさに直球勝負の真剣な
語り口にとても魅力を感
じた。これからも想像力
豊かな素晴らしい作品を
生み出してくれることを
期待したい。

（水越）

町田の学校図書館を考える会　報告

＊定例会　10 月 19 日(水)10 時～於：公民館にて、出席　市川、清水、谷釜、伴、水越、八木

子どもの本連続講座

時間はいずれも午後１時半から３時半、場所は中央図書館中集会室もしくはホール。チラシ発送済み、当日の受付・司会・本の紹介の分担などを決める。お知り合いにもお声がけをお願いします。

11/5(土)　読んでみよう！ノンフィクション
講師：　神戸 光男氏（日本子どもの本研究会副会長）

11/12(土)　知っている？　著作権あれこれ
講師：　植村 和久氏（ひさかたチャイルド社）

12/4(日)　こんなに活き活き！　学校図書館
講師：　大江 輝行（自由の森学園中学校図書館司書）

1/21(土)　本の補修
講師：　市立図書館／林さん

1/28(土)　ブックトークの楽しみ
講師：　市立図書館／北村さん

2/11(土)　みんなで話そう　交流会　文庫、読み聞かせボランティア、図書指導員、教員などいろいろな立場の人が集まって話しましょう

＜9月例会報告＞30日(金)13：00～16：00
於・中央図書館中集会室

出席	伊藤　久保　島尻　中山　前島 増山　丸岡　桃澤　　顔見せ・手嶋

●著作権について意見交換。
●映画「日本国憲法」の DVD 上映の際、今後も憲法 9 条についての学習会の必要性が挙げられた。次回の例会で改定第 1 次案や外国の憲法など学ぶ。
●図書館の委託問題についてきちんと学習したい。
・次期市長候補者に、町田市の図書館行政についてアンケートをとるなどしたい。
●会報「知恵の樹」次号(104 号)掲載文について。
●各団体・個人の報告。
・学校図書館を考える会…子どもの本の連続講座を行なう（7P参照)。
・野津田雑木林の会…「第20回のづた丘の上秋まつり」　11 月 3 日(祝・雨天の時は6日)／10：00～15：30 ヤマナラシ広場／20 周年記念特別企画：14：30～アフリカの楽器“ムビラ”の演奏＆手作り紙芝居「神につながる音」上演。
・図書館…移動図書館車が買い替えで新しくなった。またサービスポイントの見直しをしている／図書館の仕事が、インターネットでの予約その他でだんだんハードになってきている／忠生市民センター建て替えの話が出ており、そこに図書館を入れるという構想が浮上している／多摩地域の図書館長会のプロジェクトが、共同保存図書館の立ち上げを検討している。
・かえで文庫…9 月 24・25 の成瀬センターまつりで 2 日間喫茶室を開き、文庫運営資金を少々得た／活動も 30 年近くとなり、見なおす時期／例会の時これからの文庫について話し合いたい／ 町田市立図書館 10 館構想の中に成瀬地域が入っているが、なかなか図書館ができない。「図書館を！」の声を再びあげていきたい
・出版を祝う会…10 月 28 日夜、辻由美さんの『街のサンドイッチマン』の出版を祝って。

【おしらせ】

★ **11 月 4 日（金）10：00～12：00　町田中央公民館** 公民館自主男女共生学級研修企画**「戦争の作り方」**　講師：伊藤美好氏 定員 50 名　〈申し込み：042-728-0071　公民館〉

★ **11 月 13 日（日）**＜子ども夢基金事業＞全国子ども読書推進フェスティバル：**町田市立中央図書館６F ホール／10：30～１2：00「子どもたちへのお話会」**（まちだ語り手の会）／**13：30～15：30「読み聞かせ講座」**（小松崎進さん・この本大好きの会代表）／町田市教育委員会・市立図書館後援
直接開場へどうぞ
（主催：日本生涯教育企画 03-3269-3322）

★ **11 月 20 日(日)10：30～ 第 20 回まちだ子どもフェスティバル／本町田東小学校／**さまざまな団体の模擬店、こども実行委員による楽しい催し物が全校舎で繰り広げられます。和室では①12：30～②14：00～「おはなし会」

★ **11 月 20 日(日)13：30～16：30 鶴川市民センター２Ｆホール**　鶴川自治研究集会**「鶴川の歴史に学び鶴川市独立の夢を語る」**／「浪江虔さんの農村図書館と鶴川」杉山弘氏・自由民権資料館学芸員／「鶴川地域の茅葺き家屋を見る」（実態映像調査報告）
資料代 500 円(問：042-734-8831 柏木)

★ **11 月 23 日（水・祝）「サルビアフェスタ 2005」町田市民ホール９：００～１７：００**／第 5 会議室「絵本ワールド」：まちだ語り手の会協力・図書館担当の部屋…絵本読み聞かせ・おはなし…がいっぱい。お子さま連れでどうぞ

★ **11 月 26 日(土)10：00～16：30「神奈川学校図書館大交流会」　もみじざかじょいぷらざ神奈川婦人会館 2F 第 2 会議室**（桜木町下車 10 分）資料代 300 円（問 045-303-5096 村島）

あとがき 忙しいさなかパソコンが壊れた。作業が一区切りついていたせいか、データーが全てなくなりこれで整理できるという変にスキッとした感覚を味わった。だがそれは一瞬の間で、失ったデーターを取り戻すのに四苦八苦している。（M⁴）